No.10

＋１（プラスワン）

〒658-0047　神戸市東灘区御影3-7-11
日本キリスト教団 東神戸教会牧師
2015年10月発行

「ｃｏｎ　ｆｕｏｃｏ」

牧師　横山順一

九月二十二日、世良美術館で行われた崔善愛（チェ・ソンエ）さんのピアノコンサートに行く機会をたまたま与えられた。

正直、ショパンもピアノも格別の関心を抱いていなかったが、このコンサートで変えられた。

私にとって彼女は、ピアニストとしてではなく、一種のあこがれの存在だった。どういう意味でかというと、「指紋押捺拒否運動」の中のあこがれ。

学生時代に出会ったオモニ・ハッキョ（在日韓国朝鮮人のお母さんのための識字学校）も含めて、一九八〇年代は、指紋押捺拒否支援運動に少なからず関わり、そこで多くの在日韓国朝鮮人の人々と出会った。デモや学習会に頻繁に出席した。

西宮の金牧師のお嬢さんの「ソネ」さんが逮捕された時、警察署前で集会をした。普段穏やかな金牧師が、タダならぬ形相で「娘を早く返せ！」と叫んだ。私たちも胸を熱くして「ソネを返せ」と合唱した。

崔善愛さんは、父の在日大韓基督教会小倉教会の崔昌華（チェ・チャンファ）牧師と一緒に指紋押捺を拒否し、その結果、アメリカ留学の際に外国人登録証をはく奪された人だ。(最終的に最高裁まで争って敗訴、その後永住権を回復)。二十年に及ぶ長い闘いだった。

「ソンエ」は少し短くして「ソネ」とも呼ばれる名前で、金牧師の「ソネ」さんと共に、私たち支援者の中で、闘いの象徴となったのだった。

崔昌華牧師（一九九五年召天）は、キリスト教界にあって、名高い人権運動家で、神学生当時の私には雲の上の存在に近かった。

それに比べると、ソネさんは当時音大生で、身近な感覚があり、「凄い、よく拒否したな」と感心していた。感覚的にその程度で、まだまだ何も分かっていなかった。

今般、出版されたばかりのソネさんの著書、「十字架のある風景」（いのちのことば社）を持参し、希望どおり、コンサート後にサインをいただいた。

そこには「ｃｏｎ　ｆｕｏｃｏ」とあった。音楽用語で、「熱烈に」という意味だ。

ソネさんのコンサートは派手ではなかった。語りは静かで口数も決して多くはない。かつての自分の闘争に触れることもなかった。

でもポーランドを追われたショパンの歩みをとつとつと紹介しながら、そこに「熱烈な」思いを込めて演奏された。「別れの曲」を聞きながら、ふいに涙が出た。

私の中で、不備はあるにせよ制度の廃止に伴って一応の決着がつけられた指紋押捺拒否闘争だった。

ソネさんは同著の中で、

『私は五十五歳になってもなお、選挙権を持った事がない。友人は「あなたに選挙権がないなんて、嘘でしょう。信じられない」と言う。しかし、その「信じられない」不条理にだれも立ち上がらず、声もあげない。「信じられないこと」は、こうして続いてゆく。』

こう綴っていた（一四三頁）。

何も終わっていなかった。私は釜ヶ崎で労働者の選挙権回復を訴えながら、目を向けてはいなかった。ただただ情けない。

知らなかったが、彼女は私と同い年だった！不思議な縁と新たな課題を感じている。